

## 無窮

コートを羽織り 舗石をゆく  
最低限の感情から 一步も  
踏み出ることなく

誰もここに来ることはできない 誰ひとりとして  
逃亡者でさえ ここに身を潜めることはできない

雨は既に止んでいる 舗石はしっとりと  
濡れている 僕は知っている  
この薄暗い路地に 息を潜めるものを

数世紀の昔 君はここに居た  
裸のままの美しさで、意識というものを忘れ  
そして、今の僕にも何の欲望もない

僕は濡れた舗石に触れてみる そして  
君の冷たい肌に触れてみる

目を閉じてもよいのです 目を開いていても  
見ることなどないのだから

君は知っている 生と離別した意識を  
僕は知っている 生を超えた意識を

遠くから近づく者を待ち受けるように  
静かに息を潜めるものを 僕たちは知った

現在というものは消えているのです  
ただ僕たちの反響だけがあるのです

あの、雲を浮かべる高い空にもまして  
あの、梢の葉群れからこぼれ落ちる光の粒にもまして  
僕たちは美しい それを歌い上げる声が渡って来る

(2003.6.10)